法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

<文献紹介>吉野正敏著(2011) 『古代日本の気候と人びと』, 学生社, 198ページ

SATO, Norihito / 佐藤, 典人

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
44
(開始ページ / Start Page)
101
(終了ページ / End Page)
102
(発行年 / Year)
2012-03-22

Hosei University Repository

【文献紹介】

吉野 正敏 著（2011）
「古代日本の気候と人びと」，学生社，198 ページ，2400 円（＋税）．

昨年の初冬，学部生を引率して丹後半島を巡る機会があった．その際，丹波篠山から入って鳥取砂丘までの行程を組んだ．時雨を体験するには格好の季節でもあって晴れ間が覗いたかと思ったら氷雨が降りだす天気のもと，京丹後市の『間人』を通った．これで「たいざ」と読む．ご承知のように聖徳太子の生母の名に由来する重みのある地名である．ここの漁港に水揚げされる松葉蟹は高級品で美味であるとか？

東京から現地までの行き帰りの車中で手にした新刊本が，気象と世界史上の出来事を取り扱った内容で，とても興味深く一気に読み終えた．帰京したら，学生時代の恩師の一人である吉野正敏先生から標記の書物を戴いた．先生の著わしたこの成果は，偶然にも直前に読み終えた上述の書籍内容と共通する一面を有し，いわゆる「歴史気候学」的な視点に立脚したとても貴重な研究の刊行と言える．その奥深い記述を的確に理解するのには，応分の見識の広さが読み手にも求められる言説内容であった．臆面もなく自らの浅学非才を顧みず，ここにいくつかの事項を取り上げながら，本会の会員諸氏への一読の推奨に置き換えたい．

本書の構成は，次のようになっている．

第１章　序章
　1　背景と目的
　2　人間の歴史と気候
　3　古代の気候の推定
第２章　古代以前の日本の姿
　1　農耕社会と気候
　2　農耕と気候の変化
第３章　古代日本の気候と人びと
　1　3～10 世紀の日本における気候と人間の歴史
　2　8～10 世紀の気候小最良期
　3　古代の土木工事
第４章　東アジアとのかかわり
　1　縄文・弥生の日本と中国・朝鮮
　2　中国の気候変化と人びと
　3　朝鮮半島
　4　10 世紀以降の東アジア
　5　東北アジアと古代日本
第５章　東南アジアとのかかわり
　1　熱帯中国の 8～10 世紀
　2　東南アジアの群島部（マレー語世界）
　3　インドシナ半島
　4　東南アジアと日本
第６章　南アジアはどうだったか
　1　インド史からみる
　2　モンスーン
　3　スリランカのタンク
　4　北アフリカの夏の季節風関係
第７章　古代の自然認識と文化
　1　古代日本人の季節
　2　古代の気候地名
　3　風神・雷神
　4　沙漠認識
第８章　東北地方の人びとの動き
　1　日本の東北地方－温暖化する気候の下で
　2　志波城の例から
第９章　地域スケールでみた気候と人びと
　1　神話の構成と気候条件
　2　古風土記の時代
　3　出雲
　4　伊勢
　5　ヤマト政権と出雲・伊勢
第 10 章　終章
　1　古代日本の気候と人びと
　2　地球温暖化－古代と現代
　3　気候と人間活動

本書のこのような目次構成からも察せられるように非常に学問的な間口が広い．

まず，最初に第２章の「古代以前の日本の姿」に評者は関心を抱いた．縄文時代から弥生時代にかけて農耕社会が日本列島に成立していく過程に関しての記述である．“縄文＝暖かく，弥生＝寒冷”という図式はあまりに大まかな捉え方だと著者は言及している．やはりその間でも気候は変化しており，それに伴って人間集団の対応の仕方も異なって当然であろう．気候が変わると海面が変動するので海進・海退が生ずる．その海岸線の移動に関わって土地利用はもとより集落の位置・形態・規模が変わると述べている．

とくにこの項で，日本産の樹木年輪の炭素 14 年代などをもとに，縄文時代晩期後半に伝播した水田稲作の東進に触れている．九州北部に水田が開かれてから青森の砂沢遺跡にそれが作られるまで約 500 年の期間を要したとする一方で，東海地方ではそれが一時的に停滞し，そこから関東地方の南部まで広がるのに約 700 年かかったと述べている．結局，関東地方に水田稲作が伝わったのは，日本海沿岸をそれが北上した後，迂回する形で太平洋側を南下した現れなのか，それとも時間的な不連続を介在させながらも東海地方から徐々に伝播した結果なのか興味をひく．

と言うのも，評者にはユーラシア大陸東端の日本列島と西端のイギリスでの農耕伝播によって惹起された人類の森林破壊の時期，伝播に関する対照性が想起されたからである（安田：1974）．すなわち，イギリスでは南部への農耕の伝播によって最初に引き起こされた人為的植生破壊が北方へ連続的に伝わり，約 2000 年を要して北部に

Hosei University Repository

到達している．それに対して，日本では九州北部から瀬戸内を経て，近畿・三河まで比較的，短期間のうちに伝播した後，東海地方でその波及の仕方に停滞・中断が見られた．このように東海地方での伝播における不連続が共通して指摘されており，その合理的な理由の所在に関心が及ぶ．

さらに日本列島では，日本海沿岸を北上する伝播が太平洋側のそれよりも早いという点が注目される．この類いは，中央と津軽・十三湊との繋がりを例示するまでもなく，その後の様々な歴史的事柄においても確認されている．

第3章で扱われている“古代の土木工事”についても興味深い記載が見られる．6世紀末頃の聖徳太子が摂政であった頃に，遣隋使を派遣して大陸との交流が図られた．それ以前にも，朝鮮半島から渡ってきた人たちは溜め池の文化などを日本に伝えている．とりわけ西日本にはそのような影響が色濃く残っている．それとともに渡来人は高度な土木技術をも伝えたようである．とくに斎明天皇の時代には，多くの土木工事が飛鳥地方を中心に行なわれたと言う．そこには水を溜めて効果的に灌漑する必要性が伺われる．その反動のためか，その傍らで斎明天皇の失政が指摘される事件もあったと述べている．いずれにせよ，多雨・洪水・旱魃などの気候の変化にも，時の政権が大いなる関心を払う必要があったと見られ，それへの対応の仕方次第では，政権の基盤が揺らぐ可能性もあったと説いている．この観点から史実を紐解くアプローチが歴史学では試みられているのだろうか？

第4章の東アジアとのかかわりに目を転ずると，やはり上で触れた気候の変化が人間の動向を大きく左右している．なかでも10～12世紀にかけての唐の衰亡とその周辺諸国における変化である．それに地続きである北方からの遊牧民族の侵入が重なっている．この背景として，10世紀後半からの気候的な悪化やその後に続く寒冷化の時期がこのような動きに符合しており，それゆえ気候の変化が時々の安定した社会基盤の構築を阻害する因子であった点を否定はできない．これと好対照であったのが，渤海国が栄えた8～10世紀の間の温暖な気候条件との一致であると言う．

東南アジアとのかかわりを述べている第5章では，インドシナ半島・カンボジアのアンコールワットに多くの紙数を割いている．この遺跡群はトンレサップ湖の北岸の平野一帯に分布している．JICAによる貴重な報告書に拠ると，この湖の水位変動は6～9m前後で，乾季と雨季のそれが年により非常に変わると説明している．この湖を活用した水利灌漑網が，アンコール王朝の経済的な基盤を支えたのは言うまでもない．このような大寺院の建設に要した人力を試算した結果，1日7時間労働で，約2.5万人が34年間費やしたとしている．さらにこれだけの労働力を支えるには，最盛期で王都周辺に約60万人の人々が居住していたと推算している．このような王朝がなぜ崩壊したのだろうか？著者は開発の限界と灌漑の行き詰まりに直面していたと認めつつも，年による極度な乾燥に起因する旱魃が追い打ちをかけたと，つまり気候の変化が相乗的にこの王朝の崩壊に拍車をかけたと推論している．加えてこれはわずかな環境変化が体制維持を破綻させる可能性を物語るものとして，現代にも通じることを示唆している．

第6章では南アジアを扱っている．とくにモンスーンとの兼ね合いから，インドやスリランカの灌漑，さらには北アフリカ・ナイル川の洪水の問題が記述されている．スリランカでは南西モンスーンの季節が雨季であり，地形起伏とあいまって国土の北東部を中心に乾燥している．中央高地から流出する河川水を利用する灌漑システムなどを，この地では古くから構築していた．それは人工の貯水池を活用するもので，その起源は紀元前に遡ると言われている．当時から，それ相応の測量や建設に関わる技術を保持していたことの証であり，その文明の発展は驚嘆に値する．

一方，ナイル川の氾濫と肥沃な土壌の堆積はよく知られている．この川を国土に抱えるエジプトの農業の歴史は，ナイルの洪水と氾濫の歴史とともに歩んできたと申しても過言ではない．この河川の記録から，温暖な時代には洪水や氾濫が少なく，その背景には，夏の季節風との関わりから上流部の降水量の減少が介在していると述べている．つまり，このような気候変動が農業生産を左右し，それが食料不足に連動して，ついには貧富の差を招来する構図に触れている．

次の章では古代の自然認識と文化に関して，著者の卓見とも言える記述が披露されている．なかでも地名などの由来には多くの興味を抱くに十分と言えよう．例えば，「信濃」が風に因んだ地名であったとか．さらにまた沙漠認識という項にも関心を覚える．厳しい自然環境にある沙漠や半乾燥地域では，わずかな気候の変化でも増幅するような形でその影響を強く被る．かの「世界の四大文明」の発祥地が，ことごとく半乾燥地域に位置していることも，気候変化の影響と強く関わっている．当然ながら，そのような過酷な環境は精神構造をも左右するので，厳しい戒律の一神教の世界と重複する傾向にある．

第8章ではとくに東北地方に焦点を照射している．古代のこの地の城柵の北上では，日本海側が太平洋側よりも数十年早いものの，北上する進行速度はほぼ同一という指摘がなされ，稲作の伝播と森林破壊の北進速度(既述)と類似している点が脳裏に浮上する．

続く第9章では，神々の聖地とも言える出雲と伊勢を対比しての記述を試みている．各々，日本海側と太平洋側に該当している地域でもあり，大和を含めた気候区の比較という目線からも面白い．

歴史の転換には必ず画期がみられると終章で述べている．温暖期から寒冷期へ，あるいはその逆の気候への変化がその画期の形成に関わっているとの考えである．歴史的な人間の営みに気候環境やその変化が影響を及ぼさないとは考えにくい．でも評者の学生時代の，やれ自然環境決定論だとか，環境可能論だとかの批判的な講義内容を想起するにつけ，双方には複雑ながらも厳然とした関係が存在するとの著者の指摘に，いささか意を強くした次第である．

本書を詳細に紹介することは，評者の限度を超えているので，関心を抱いた箇所を中心に紹介した．既述のように「歴史気候学」の視点から本書が著わされたのは誠に喜ばしく，是非，会員諸氏にも一読を勧めたい書籍である．

(法政大学・佐藤典人)